

まんだら通信

第153号 (通巻185号)

平成21年(2009)03月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



スリランカの成田山幼稚園

日本はアジアの国々に迷惑をかけた、戦後六十年余りずっといわれていました。韓国や中国も、それを言えば自分の国に有利なので、ことあるごとに言い立てます。新聞やテレビも、肩を持つような言い方をします。そう言われ続けると、やっぱり日本は悪かったんだと思えてきます。

ところが、それらの国に行くと見ると、日本人への親しげな眼差しにビックリします。お金をばらまく成り金だからではなく、個人としても国としても信用出来るからということですが。

中でもスリランカは対日感情の良い国で、日本の名前のついた幼稚園が至るところにあります。

成田山関係の幼稚園も幾つかあります。が、首都コロネボ近くの田園地帯、ランポクナガマにある『成田山幼稚園』もその一つで、菱木主監の時代に成田山名古屋別院



の援助で作られました。

その後、園児が増え(三百人ぐらいでしようか)、一クラスに四十人と窮屈になったので、親御さん達が頑張って建築資材を集めお金を負担し、工事の手伝いをして二棟新築したそうです。

運営を任されているお坊さん、アンギラサさんが、写真付きのメールで教えてくれました。

すぐ隣には犬山市のライオンズクラブなどが寄贈した、大きな成田山会館があります。こちらも老朽化したので、補修工事をしたそうです。

以前伺った時、丁度運動会でしたが子どもたちはみんな、暑い日差しの中起立したまま、スリランカの国歌と君が代を歌い、お経のお勤めをしていたことを思い出しました。

日本と同じように輸出する資源が乏しい国ですから、この子達が元気に成長してお国のためになってくれることを、私も切に願っています。

アメリカ人も気がついた?

先日の産経新聞に「リストラ最中の米、共感を呼ぶ回想録・広告会社重役からスタバ店員に」という記事が載りました。

アメリカ最大手の広告会社の重役で「ひとが欲しいと思うものはすべて」持っていて、年収16万ドル(約1580万円)だったマイケル・ゲーツ・ギル氏(68)は、15年前に突然解雇された上、脳腫瘍や離婚を経験し、地獄に突き落とされた思いの暮らした10年続けたそうです。

五年前のある日、コーヒーを飲もうと立ち寄ったチェーン店スターバックスで、黒人女性の係りから、働いて見ないかと誘われたことが縁で、時給10ドルの店員になったそうです。

始めは、嘗ての大会社の身分に較べ、今の自分の姿を惨めに思っていたけれども、一杯のコーヒーを通じて人に喜ばれることが自分の生き甲斐になり「嘗ては成功という自分の外側の物差しで人生を計っていたけれども、物質的な豊かさが幸せなのではなく、そうしたものから自由になることが幸せなのだと思付いた。

アメリカの企業文化は人材よりも利益を優先させてきたし、拝金主義が賛美されてもきた。アメリカはこの病から回復する時期に来ているように思う。」と、取材の記者に答えています。

その体験を書いた『スターバックスはいかに私の人生を救ったか』が、品切れの状態が続くほどのベストセラーになっているそうですが、日本人が昔から思っていたことにアメリカ人も漸く気付き、人の値打ちはお金の多少ではなく、そのようなものからの自由こそが肝心、ということに気付いてきたことなのでしょう。

◆今年例年になく雨や曇りの日が多く、一向に暖かくなりません。『正御影供(しょうみえく)』といって、我が真言宗の開祖弘法大師さまへの報恩の法要ですが、大正大学を今年卒業の孫弟子龍祐(改名前の祐紀)が承仕(じょうじ)という小使いの役をするそうです。

◆野草とはいわないのでしょうが、今月は【あぶらな科アブラナ属】のアブラナ、つまり菜の花です。大昔に中国からきたそうで、名前の通り昔は灯油

2時頃から教区内の大勢のお坊さまが大掛かりな法要をします。『正御影供(しょうみえく)』といって、我が真言宗の開祖弘法大師さまへの報恩の法要ですが、大正大学を今年卒業の孫弟子龍祐(改名前の祐紀)が承仕(じょうじ)という小使いの役をするそうです。

◆野草とはいわないのでしょうが、今月は【あぶらな科アブラナ属】のアブラナ、つまり菜の花です。大昔に中国からきたそうで、名前の通り昔は灯油や食用として盛んに栽培されました。現在でも古式を尊ぶ密教の行事の灯明は菜種油を

使い、芯はイグサの“ずい”『灯芯』を使います。

写真の菜の花は栽培品種ではなく、荒地や土手に咲く原種です。私の好みはお浸しのほろ苦さと噛みごたえで、本当をいうと栽培のナバナより好きです。二宮金次郎さんが、夜の読書の灯明のために荒地に蒔いたという油菜も、きっとこれだったのかなと思いがながら、日本ミツバチが来るのを楽しんでます。写っているミツバチがそれで、尻尾が黄色っぽい西洋ミツバチと違い、とてもおとなしい種類です。

2009/03/09 龍渉



余滴

◆3月21日はお大師さまがご入定された日。小塚大師では午後

につぼん人情小噺

第三十九話 散歩

最近、大変なペットブームだそうで、特に犬が大人気でございますね。テレビのコマーシャルでも、なぜかお父さんが犬だったりしましてね。

私たちの世界では、こんな小噺がございます。

いま、ペット同伴のホテルなんかがあるそうでございますが、なかには、犬を連れて入ってもいいレストランがありましてね。ある日、豪華な毛皮のコートを着ました、いかにもお金持ち風の奥様が、ちよつと小太りの愛犬を連れて、入ってまいりました。

「あつ、奥さま、いつもありがとうございます」

よほど常連なんでございましょうね、シェフが飛んでまいりまして、ご挨拶なんかしております。

すると、それを見ておりましたレストランのお客さんが、気に障ったんでしよう、突然、大きな声で怒鳴ったそうでございますよ。

「おい、ブタなんか連れてくるんじゃないよ」

奥様、思わずカーツとして怒鳴り返しました。

「何いつてるのよ、これはブタじゃないわよ、犬よ、失礼な！」

するとお客さん、言い返しましたね。

「俺は、犬に言ってるんだよ」

今日は、犬の話を書きます。

町はずれの軒の家に、シロという名前の犬が飼われていました。

雑種でしたが、その名の通り、全身真っ白な犬でした。

飼い主はひとり暮らしのおばあさんです。おじいさんが元気だった頃は、シロはおじいさんとよく散歩をしていましたから、近所の人たちもシロのことをとてもかわいがっておりました。

ところが、おじいさんが亡くなってからは、シロはいつも鎖につなれっぱなし。なぜなら、おばあさんは足が悪くて、歩くのがやつとですので、散歩などとてもできません。

通りがかつた人が「シロ、シロ」と声をかけますと、うれしそうに尻尾を振って、近寄ろうとするのですが、鎖がのどに食い込んでしまうので、前に出られません。

そんなある夜、おばあさんの家に救急車が止まり、おばあさんは病院に入院してしまつたのです。

それを知つた近所の子どもたちは、シロがこのままでは餓死してしまうと思い、学校帰りにシロに餌をあげていました。なかには、シロのために給食を食べない子もいました。

「誰かいないかな、シロを飼ってくれる人」

「お母さんに聞いたら、ダメだつて」

「うちもダメだつて。お父さん、犬が嫌いなんだ」

子どもたちは、学校の行き帰りにそんな話をしては、「シロ、シロ」と呼びかけて餌をあげていました。

それでも、シロは、おばあさんの帰りを待っていました。

ある日のこと、おばあさんの親戚らしい人がやつてきて、家の中の整理をしていました。

あさんはどこかの施設に入ることになつたようです。

その話を聞いた子どもたちは、それぞれの家で「シロはどうなるの？ねえ、シロはどうなつちやうの？」と親に説明を求めます。

「保健所に連れていかれるらしいよ」

「保健所が飼ってくれるの？」

「そんなわけないよ、きつと殺されちゃうんだ」

「そんなの、かわいそうだよ。みんなで教室で飼おうよ」

子どもたちは先生に相談しますが、それも無理だと分かりました。

そんなとき、近所に住む子どものいない老夫婦が子どもたちの願いを聞き、おばあさんの親戚に話して、シロを預かつてくれることになりました。

喜んだ子どもたちは、学校の帰りに、その老夫婦の家に必ず寄つては、シロをかわいがっています。

「ねえ、あなた、私たちは子どもがいなくてあんなに寂しかったのに、いきなり孫がたくさんできましたね」

「そうだなあ、毎日、にぎやかでうれしいね。これもシロのおかげだよ」

シロもうれしそうでした。待望の散歩も出来たからです。子どもたちは、散歩しているシロを見つけると駆け寄つてきます。シロも前足をあげて、子どもたちに飛びかかつていききました。

それから、ひと月後、シロは急に「元気がなくなりました。散歩に出かけようとすると、足を踏ん張つて、歩こうともしません。食欲もありません。子どもたちがハンバーグを持ってきてても、目にすることもなく、ただただ、座つて、ぼんやり毎日を過ごしています。

身体はどんどん痩せて、立ち上がるの

もやつとでした。老夫婦は、タクシーにシロを乗せて、獣医さんに連れて行きましたが、原因は分からないまま、栄養剤を注射してもらうことしかできませんでした。

「シロ、シロ、どうしたんだよ。シロ、ほら、水だよ、飲まなくちゃダメ、元気になつて！」

シロは尻尾を力なく振りますが、また、目を伏せてしまいます。

「シロ、大丈夫？ 痛かつたら鳴いて、どこが痛い？」

子どもたちが何を言つても、シロはただ下を向いたまま。

それから数日後に、シロは静かに息を引き取りました。

あとで分かつたことですが、シロが元気をなくした頃、飼主のおばあさんは再び病院に運ばれ、シロが死んだ日、おばあさんも病院で息を引きとつたそうです。

シロは、最後の最後まで、飼主だつたおばあさんが元気になつて戻ってくるのを待つていた……。

そんなことつて、あるんですね。

月刊誌『MOKU』3月号、三遊亭鳳豊さんの『につぼん人情小噺』の転載です。以前書きましたが、出版社と鳳豊師匠のご好意によるものです。

雑誌は他に、正論、WILL、Voices、大法輪、寺門興隆、MacFanなど毎月定期購読していますが、テレビも含めて世の中のマスコミといわれる人たちが、大向こう受けだけを狙つた大層な言い方や報道をする中、この雑誌は「これだけは是非聞いて欲しい」とでもいうかのように、一流の信用の置ける、書き手が内容の濃い記事を届けられます。

いまの世の中では多分、読み手は少ないと思うのですが「我が道を行く」いぶし銀のような、貴重な雑誌だと、有り難く勉強させてもらっています。